

報告タイトル（＊日本語と英語両方ご記入ください）

パネルの狙いと中国の政治経済研究における大規模言語モデル

“The Panel’s Aim and Large Language Models in Chinese Political Economy Studies”

氏名（所属）

伊藤 亜聖（東京大学）

ITO Asei (The University of Tokyo)

要旨（800字程度）

第一報告では、本セッション全体の問題意識を提示し、その上で、中国研究における大規模言語モデルの応用とそれが内包する問題点を示す。

まず大規模言語モデルを用いて高精度のアノテーションが可能であることを確認する(Argyle, et al., 2023; Gilardi, et al., 2023; Ornsteins, et al., 2025)。その上で、直近では大規模言語モデルを用いた場合に、人文・社会科学研究のお作法、とりわけ再現性と予測誤差にどう対処するのかに関する検討も進んでいることを紹介する(Barrie, et al., 2024; Egami, et al., 2024)。

次に中国研究における関連する自然言語処理や大規模言語モデルの応用例を紹介する。具体的には BERT による歴史資料からの計測や(Keller, et al., 2024)、大規模言語モデルによる産業政策文書の解析(Fang, et al., 2025)を紹介する。

その上で、中国系の大規模言語モデルが内包するバイアスと検閲の問題を取り上げる。報告者らが行っているアセスメントによれば、主要な中国系大規模言語モデルは政治的に敏感な問いに対して、回答を拒否したり、留保する挙動を見せる。そしてこの問題は、日本語データなどで継続事前学習したモデルにおいても残る。このことは、中国政府の AI の安全政策および検閲政策の影響が、オープンソースモデルを通じて日本や諸外国にも広がっていることを示唆する(Ito and Takaguchi, 2025)。

最後に、より広く考えると、地域研究全般で大規模言語モデル、とくに特に検索拡張生成(RAG)やエージェントにより、特定地域や資料に詳しいという地域研究者の知識そのものが代替されてしまう可能性について問題提起したい。